姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第6集

姫 路 城 城 下 町 跡

姫路城跡第 278 次　但陽信用金庫姫路支店の建替えに伴う発掘調査報告書

２０１２

姫 路 市 教 育 委 員 会

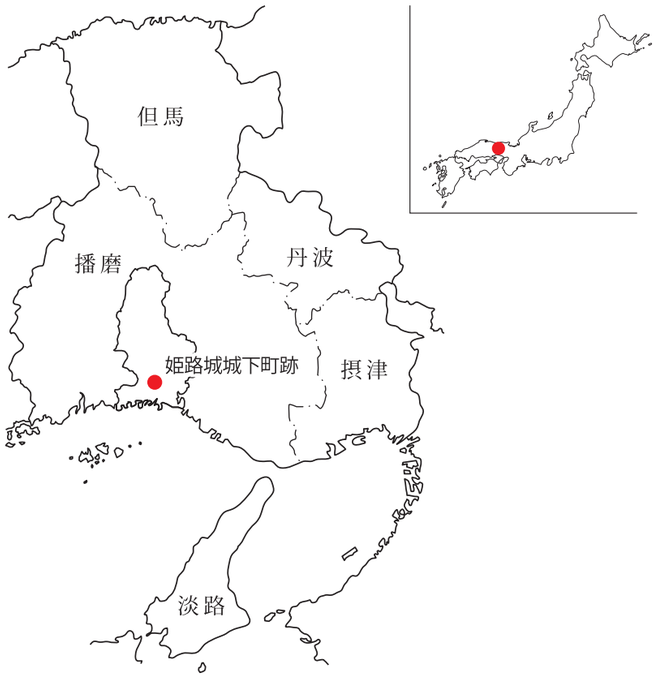
姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第6集

姫 路 城 城 下 町 跡

姫路城跡第 278 次　但陽信用金庫姫路支店の建替えに伴う発掘調査報告書

２０１２

姫 路 市 教 育 委 員 会



遺跡の位置

例　　言

1　本書は、姫路市二階町 111 番、113 番で実施した姫路城城下町跡（姫路城跡第 278 次）発掘調査の報告書である。

2　調査は、但陽信用金庫から依頼を受け、姫路市教育委員会が実施した。調査費用は但陽信用金庫が負担した。調査に際し同理事長の桑田純一郎氏には多大なご理解とご協力をいただいた。

3　発掘調査は、姫路市教育委員会埋蔵文化財センターの南憲和が担当した。

4　本書の作成に関わる作業分担は以下のとおりである。

遺物実測・拓本　　南　憲和
デジタルトレース　　野村知子（遺構）、三輪悠代（遺物）
写真撮影　　南　憲和

5　本書の執筆は南憲和がおこなった。本書の編集は野村知子の助力を得て南がおこなった。

6　調査に関する写真・図面等の調査記録、出土品は姫路市埋蔵文化財センターが保管している。広く活用されたい。

凡　　例

1　座標値は、平成 14 年 4 月 1 日の測量法改正に伴い、世界測地系に基づく平面直角座標系の数値に補正している。方位は座標北を示す。

2　標高値は、東京湾平均海水準（T.P.）を基準としている。

3　土層図及び遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版　標準土色帖』に準拠した。

4　本書に掲載した地図のうち、第1図は国土地理院発行の 2 万 5 千分の 1 地形図「姫路北部」・「姫路南部」に加筆し使用した。

5　遺構は、原則的にアルファベットと数字を組み合わせた略号で表記した。略号は SD－溝、SE－井戸、SK－土坑、SP－柱穴をあらわす。

5　遺物は、土器・瓦の種類別に通し番号を付け、瓦には「瓦」を冠し土器と区別した。実測図の断面表示は、須恵器・陶器－白抜き、磁器－網掛け、瓦－斜線で区別した。なお、番号は本文・挿図・写真図版ともに統一させた。

目　　次

第１章　はじめに
　第１節　姫路城城下町の概要……1
　第２節　調査に至る経緯・調査の経過……1

第２章　調査の成果
　第１節　調査の概要……4
　第２節　遺構と遺物……4

第３章　まとめ……6

挿図目次

第１図　調査地の位置(S=1:25,000)
第２図　調査区配置図(S=1:400)
第３図　「姫路侍屋敷図」と市街地との合成図
第４図　出土遺物(S=1:4)
第５図　旧耕土下層遺構(S=1:200)
第６図　遺物観察表

写真目次

写真１　調査前状況
写真２　確認調査１区
写真３　確認調査２区
写真４　確認調査３区
写真５　出土遺物

図版・写真図版目次

図版１　遺構全体図(S=1:100)
図版２　T1－1 平・断面図(S=1:80)
図版３　T1－2・3 平・断面図　SD1 断面図(S=1:50)
図版４　T1－4・5 平・断面図　SD2・3 断面図(S=1:50)
図版５　T2 平・断面図(S=1:50)
図版６　井戸・土坑(S=1:40)・柱穴列(S=1:50)

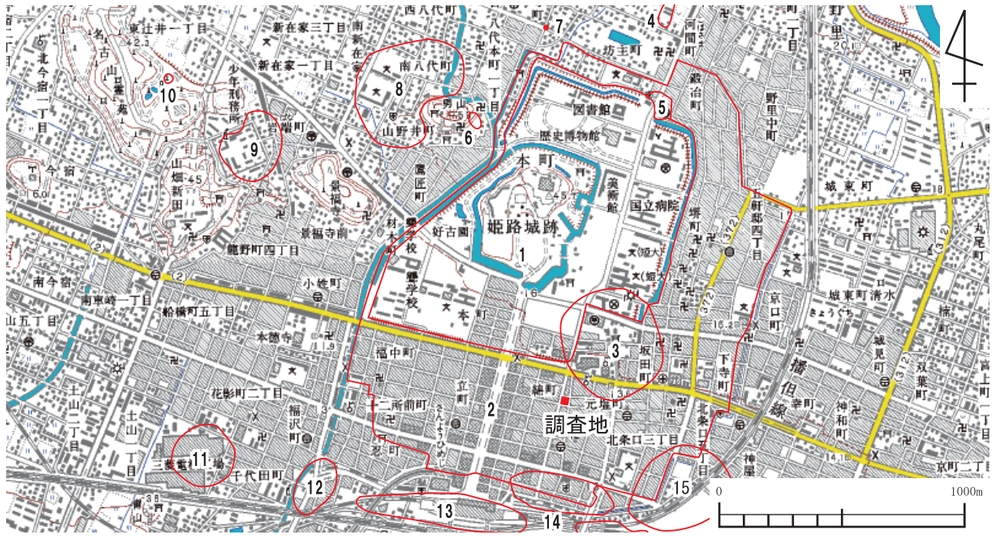
写真図版１　調査区全景
写真図版２　T1－1 検出状況　SP1 ～ 3 検出状況　T1－1 西壁　SD3・SK5　SD1
写真図版３　T1－3 南壁　T1－4 北壁　T1－4 南壁
写真図版４　T1－5 南壁　T1－6 全景　T2 全景
写真図版５　SE2　SK1　SK2　SK3　SK4　SK6

第1章　はじめに

第1節　姫路城城下町の概要

姫路城は、播磨平野の中心部に位置する姫山（標高 45.5m）とその西側の鷺山からなる独立丘陵に築かれた平山城である。東の姫山に本丸を、西の鷺山に西の丸を構え、南に二の丸、三の丸を配し、南端に大手の桜門を開く。その外周を内堀が囲繞し、さらに中堀及び外堀が巡る。中堀内（中曲輪）には主に武家屋敷が、外堀内（外曲輪）には町屋、社寺、下級武家屋敷等が配置され、近世山陽道は外曲輪内を東西に通過している。

中世の姫路城については、16 世紀中頃に御着城主小寺則職の重臣黒田重隆・職隆父子によって築城された可能性があるが、この時期の明確な遺構は確認されていない。天正 8 年（1580）に播磨を平定した羽柴秀吉は姫路城を改修し、三層の天守を築いた。城下も英賀の町人・百姓を「姫路山下」に移住させるなど繁栄策が進められた（「六月十九日羽柴秀吉書状」紀伊続風土記）。慶長 5 年（1600）、関ヶ原合戦後に入封した池田輝政は翌年から城郭と城下町の建設に着工し、同 14 年には五層六階地下一階の大天守が完成した。池田氏に代わり元和 3 年（1617）に本多氏が入ると西の丸が新造された。本多氏以降は、松平氏、榊原氏、本多氏等が短期間で交替したが、寛延 2 年（1749）に酒井氏が入封すると幕末まで続いた。



1. 特別史跡　姫路城跡　2. 姫路城城下町跡　3. 本町遺跡　4. 富士才遺跡　5. 野里門下層遺跡　6. 東山焼窯跡
7. 御茶屋町遺跡　8. 八代深田遺跡　9. 岩端町遺跡　10. 名古山遺跡　11. 千代田遺跡　12. 南畝町遺跡　13. 豆腐町遺跡
14. 駅前町遺跡　15. 神屋町遺跡

第1図　調査地の位置（S＝1:25,000）

第2節　調査に至る経緯・調査の経過

今回の発掘調査は、但陽信用金庫姫路支店の建替えを契機とする。対象地は姫路城城下町跡に位置するため、開発主体者である但陽信用金庫より文化財保護法に基づく所定の届出がなされた。これを受けて、姫路市教育委員会では平成 23 年 10 月 25 日～ 26 日にかけて遺構の保存状態を把握するため確認調査（第 270 次調査）を実施した。この結果、土坑・柱穴等の遺構が確認された。その後、開発主体者と協議を重ねた結果、建替え計画の変更は困難との結論に至り、店舗の基礎部分を対象に本発掘調査を実施する運びとなった。本発掘調査（第 278 次調査）は平成 24 年 4 月 10 日～ 21 日までおこなった。調査面積は 80㎡である。整理作業は 4 月 24 日から開始し、報告書の刊行をもって完了した。

発掘調査は以下の組織・機関でおこなった。

調査組織

姫路市教育委員会

教育長	中杉隆夫
教育次長	林　尚秀
生涯学習部長	小林直樹
文化財課長	福永明彦
文化財課係長	大谷輝彦（調整）

調査機関

埋蔵文化財センター

館長	秋枝　芳
係長	岸本幸男（庶務）
同	森　恒裕（調整）
技術主任	中川　猛（調整）
同	南　憲和（調査・整理）

平成23年度　確認調査（第270次調査）

遺跡調査番号：20110172

調 査 面 積：15㎡

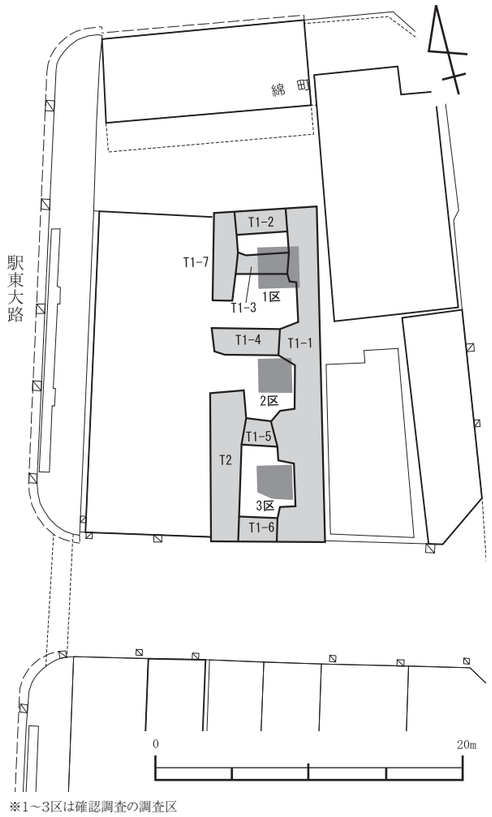
調査担当者：森　恒裕

平成24年度　本発掘調査（第278次調査）

遺跡調査番号：20120008

調 査 面 積：80㎡

調査担当者：南　憲和



※1～3区は確認調査の調査区

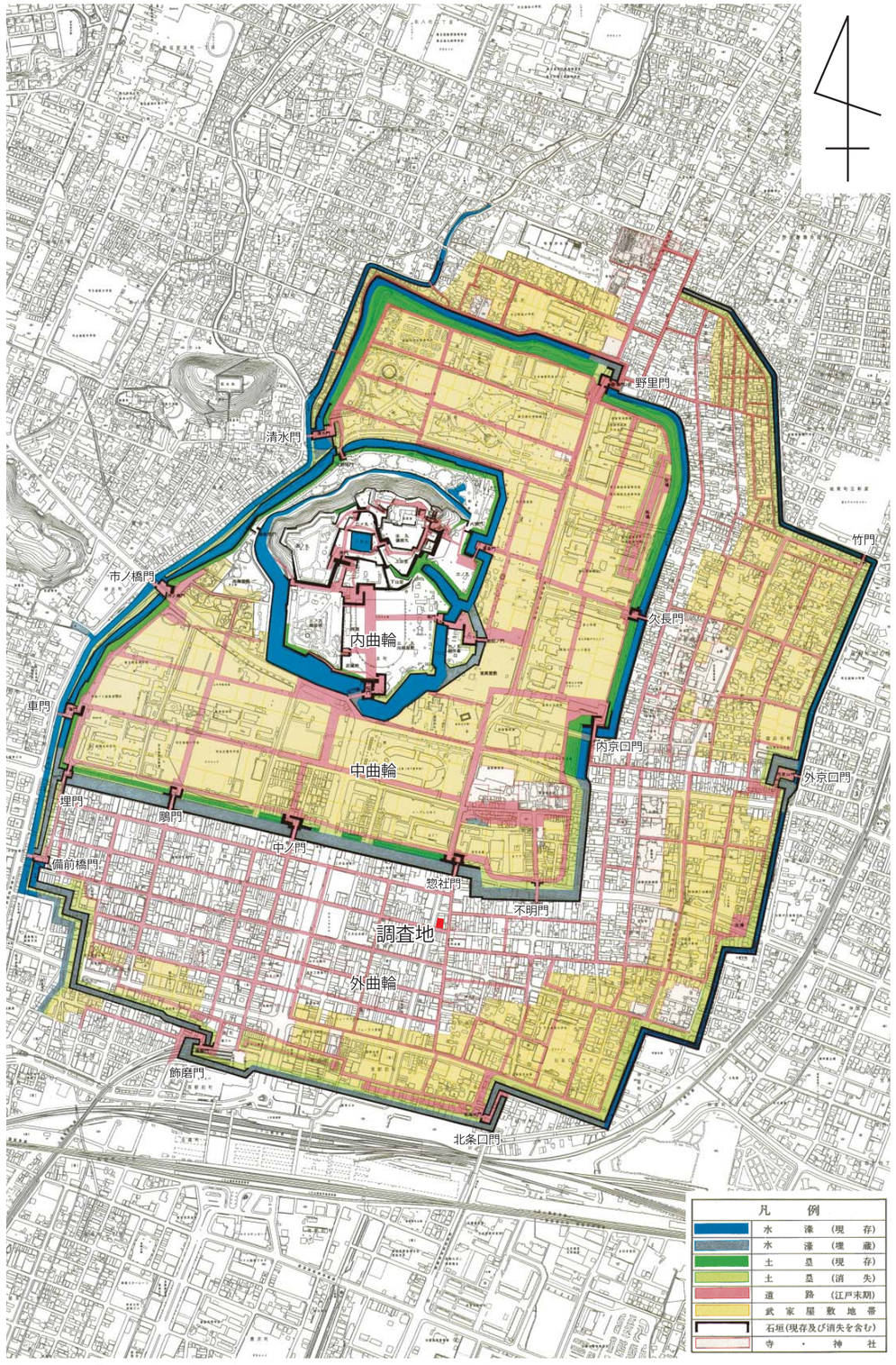
第2図　調査区配置図（S＝1:400）

写真1　調査前状況（南東から）

写真2　確認調査1区（南から）

写真3　確認調査2区（南から）

写真4　確認調査3区（南から）



第3図　「姫路侍屋敷図」（文化13年［1816年］以前）**と市街地との合成図**(1)

第２章　調査の成果

第１節　調査の概要

調査地は姫路城城下町跡の南西部の外曲輪内に位置し、惣社門から南に約 150m離れた地点にあたる。調査区は建築物の基礎及び地中梁が入る箇所を対象に設定し、T1－1 ～ 7、T2 と呼称した（第２図）。調査地の層序は南端から約 2/3（T1－4）付近を境に南側と北側で様相が異なる（図版 2）。T1－4 以南では、地表から約 15 ～ 20cm の現代の盛土、約 10 ～ 20cm の灰黄褐色土と黒褐色土の互層［第Ⅰ層］、約 30cm の灰黄褐色土［第Ⅱ層］、約 20cm の灰黄褐色土（旧耕土）［第Ⅲ層］、約 10cm の灰黄褐色土［第Ⅳ層］が存在し、標高 11.9 ～ 12.1mでにぶい黄橙色シルト［基盤層］に至った。第Ⅰ層は叩き土間の層で近代以降の遺構面となるが、撹乱により遺存状況はよくなかった。西側（T2）では基盤層がやや上昇していた。一方、T1－4 以北では幕末・近代以降の掘込み及び撹乱が顕著に入り込む複雑な状況を呈し、第Ⅲ層の上に明確な第Ⅰ層及び第Ⅱ層は認められなかった。遺構は基盤層の上面で検出した。

第２節　遺構と遺物

井戸２基（SE1・2）、溝３条（SD1 ～ 3）、土坑６基（SK1 ～ 6）、柱穴８個（SP1 ～ 8）を検出した。遺物量は 18ℓ入りのコンテナ２箱を数える。

１．井戸

SE1（図版 1）はコンクリート製の井戸で、井戸枠は直径 0.9m、深さ 1.1m以上を測る。SE2（図版 1・6、写真図版 5）は石組みの井戸で、直径 1.3m、深さ 0.8m以上、掘方は直径 1.7 ～ 2.0mを測る。ともに、玉石で埋め戻されており、近現代まで利用されていたものであろう。

２．溝

SD1（図版 1・3、写真図版 2）は調査地の北端付近に位置する。第Ⅲ層の直下で検出した。幅 1.4 ～ 1.5m、検出面からの深さは 55cm を測る。主軸方向はN－約 80°－E である。東側は SE1 に、西側は SK2 に切られる。遺物は須恵器甕（1）、備前焼壺（2）が出土した。

SD2（図版 1・4）は T1－1 に位置する。第Ⅲ層の直下で検出した。幅 25cm、検出面からの深さは 6cm を測る。遺物は土師器小片が出土した。

SD3（図版 1・4、写真図版 2）は T1－1 に位置する。第Ⅲ層の直下で検出した。主軸方向はN－80°－E で、幅 60cm、検出面からの深さは 15cm を測る。遺物は出土しなかった。

３．土坑

SK1（図版 1・6、写真図版 5）は T1－1 に位置する。南北 86cm、東西 45cm 以上、深さ 23cm を測り、東半分は調査区外に広がる。断面形は逆台形を呈す。遺物は平瓦片が出土した。

SK2（図版 1・6、写真図版 5）は調査地の北西部に位置する。第Ⅲ層の直下で検出した。南北 1.16m 以上、東西 2.1m以上、深さ 90cm 以上を測る。東側で SD1 を切り、南側では撹乱に切られる。遺物は備前焼壺（3）、漳州窯系の青花皿（4）、古代の丸瓦（瓦 1）が出土した。

SK3（図版 1・6、写真図版 5）は T1－5 に位置する。直径 86cm の円形で、検出面からの深さは 30cm を測る。断面形は逆台形を呈す。遺物は江戸時代前～中期頃の軒平瓦（瓦 2）のほか、天目碗、備前焼徳利の小片、白磁の極細片が出土した。

SK4（図版 1・6、写真図版 5）は T1－5 に位置する。南北 66cm 以上、東西 53cm 以上、検出面からの深さは 36cm を測り、東側を SK3 は切られる。底部には凹凸がある。遺物は出土しなかった。

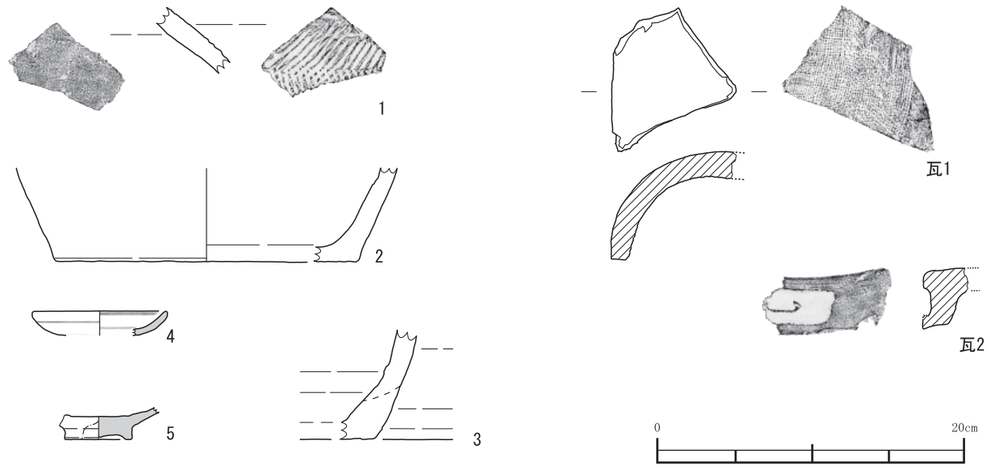
SK5（図版 1・6、写真図版 2）は T1－1 に位置し、SD3 を切っている。南北 40cm、東西 45cm、検出面からの深さは 15cm を測る。遺物は施釉陶器、土師器小片が出土した。

SK6（図版 1・2、写真図版 5）は T1－1 に位置する。第Ⅱ層の直下で検出した。南北 44cm、東西 15cm 以上、深さ 36cm を測り、西半分は調査区外に広がる。遺物は鉄絵の施された肥前系陶器の細片（6）が出土した。

４．柱穴

SP1 ～ 3（図版 1・6、写真図版 2）は T1－1 に位置する柱穴列で、柱間は SP1 から 1.65m、1.77mを測る。主軸方向は N－8°－E で、柱の掘方は 20 ～ 27cm、検出面からの深さは 12 ～ 20cm である。遺物は出土しなかった。

SP4 ～ 8（図版 1・6、写真図版 4）は T2 に位置する柱穴列で、柱間は SP4 から 65cm、50cm、34cm を測る。主軸方向はN－41°－E で、柱の掘方は 13 ～ 23cm、検出面からの深さは 2 ～ 13cm である。遺物は出土しなかった。



第4図　出土遺物（S＝1:4）

写真6　出土遺物

第3章　まとめ

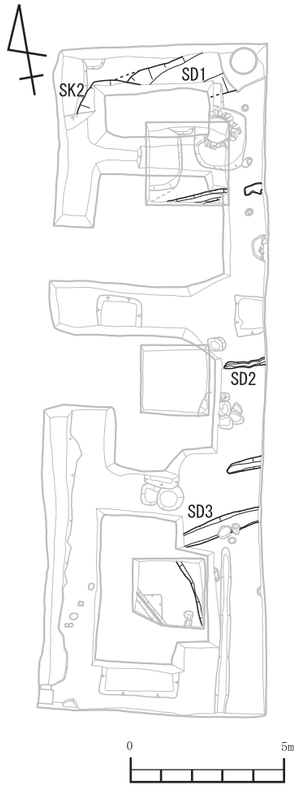
第Ⅲ層（旧耕土）は概ね調査区全体で確認された。第 5 図は調査区の断面から確実に第Ⅲ層直下で検出された遺構を抽出したものである。これによると SD1～3 等の溝及び SK2 が該当する。これらの遺構から出土した遺物は少量で時期を特定するには至らないものの、16 世紀後葉から 17 世紀初頭（池田氏時代）を下る遺物は含まれておらず、それ以前の可能性がある。また、遺構の軸方向は概ね N－10°－E で揃うことが読み取れる。

次に第Ⅲ層から切り込まれる遺構は SK6 のほか、T1－1 中央部でも土坑状の落ち込みが散見された（図版2）。SK6 からは 17 世紀前半頃の遺物が出土しており、第Ⅲ層の形成は 17 世紀前半を下らない可能性がある。

江戸時代に描かれた城下町絵図から調査地付近をみると、池田氏時代は不明であるが、17 世紀中頃（第1次榊原氏時代）以降、地割に大きな改変はなく、「東二階町」の町屋として幕末まで継続したことが窺える。

近年、外曲輪内における発掘調査件数は増加傾向にあり、本町 168 番地で行なわれた第 205 次調査では、石組み等の区画施設の造り替えに対応して盛土され、町屋の地割が変更されたことが確認されている (2)。個々の実態は、調査成果の蓄積により次第に詳らかになってくると思われるが、基本的な街区のプランを維持しつつ小規模な改変はおこなわれたとみられる。

なお、調査地の地割は池田輝政が姫路築城の基準線としたとされる築城ライン（N－約14°－E）と概ね一致するが、今回の調査ではこの軸方向に載る明確な遺構は検出されなかった。



第5図　旧耕土下層遺構（S＝1:200）

註

(1) 「姫路侍屋敷図」（姫路市立城郭研究室所蔵）は酒井氏時代中期の絵図であるが、藩校好古堂が大手門筋に移転していないところから、文化 13 年（1816）以前の状況を描いた図とみられる。

(2) 中川猛『姫路城城下町跡－姫路城跡第 254 次 南部中堀発掘調査報告書－』姫路市教育委員会 2011 年、同「姫路城跡・外曲輪 マンション建設（第 205 次調査）」『城郭研究室年報』VOL.12 姫路市立城郭研究室 2003 年

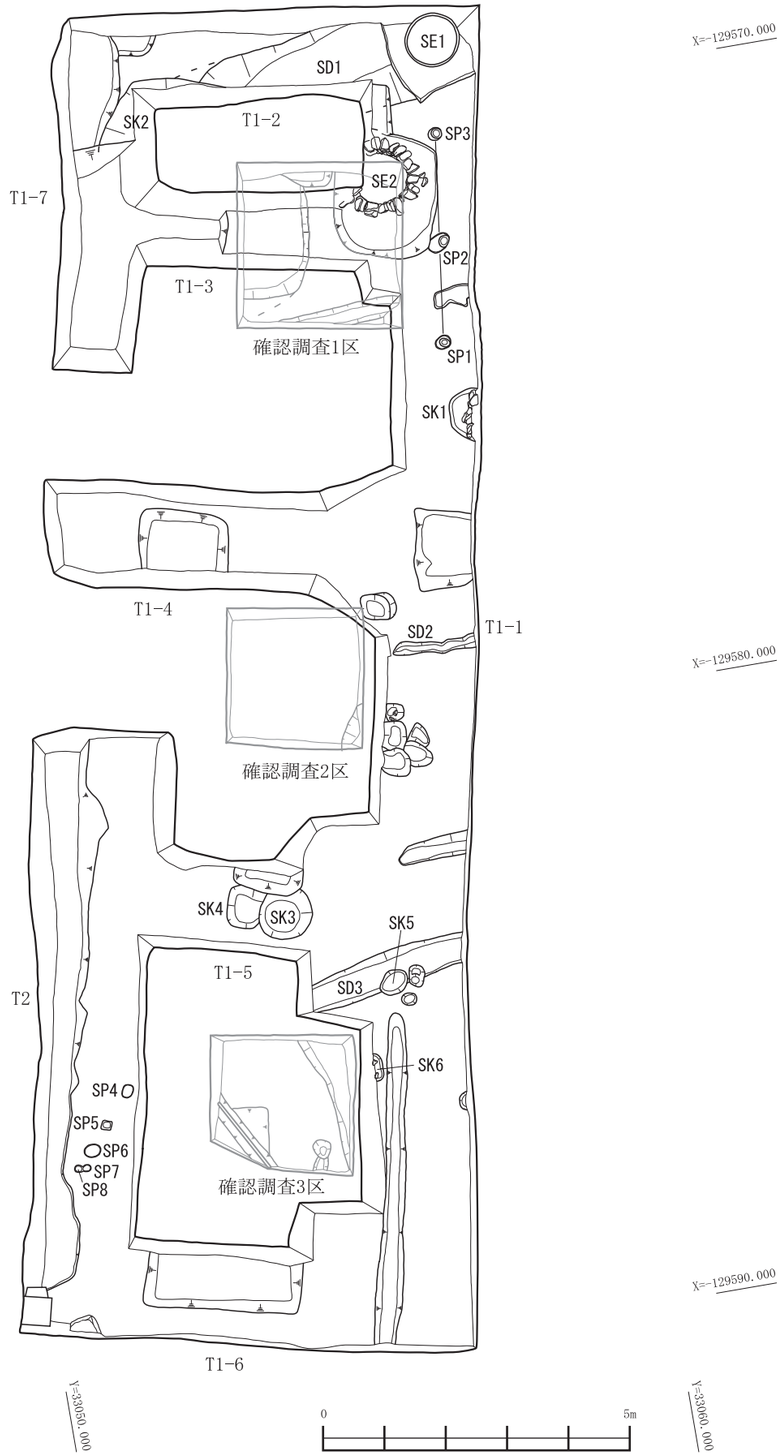
参考文献

姫路市史編纂委員会『姫路市史 第 14 巻 別編姫路城』姫路市 1988 年
多田暢久「姫路城」『季刊考古学』103 号 雄山閣 2008 年
森恒裕「姫路城下町」『関西近世考古学研究』V 関西近世考古学研究会 1997 年

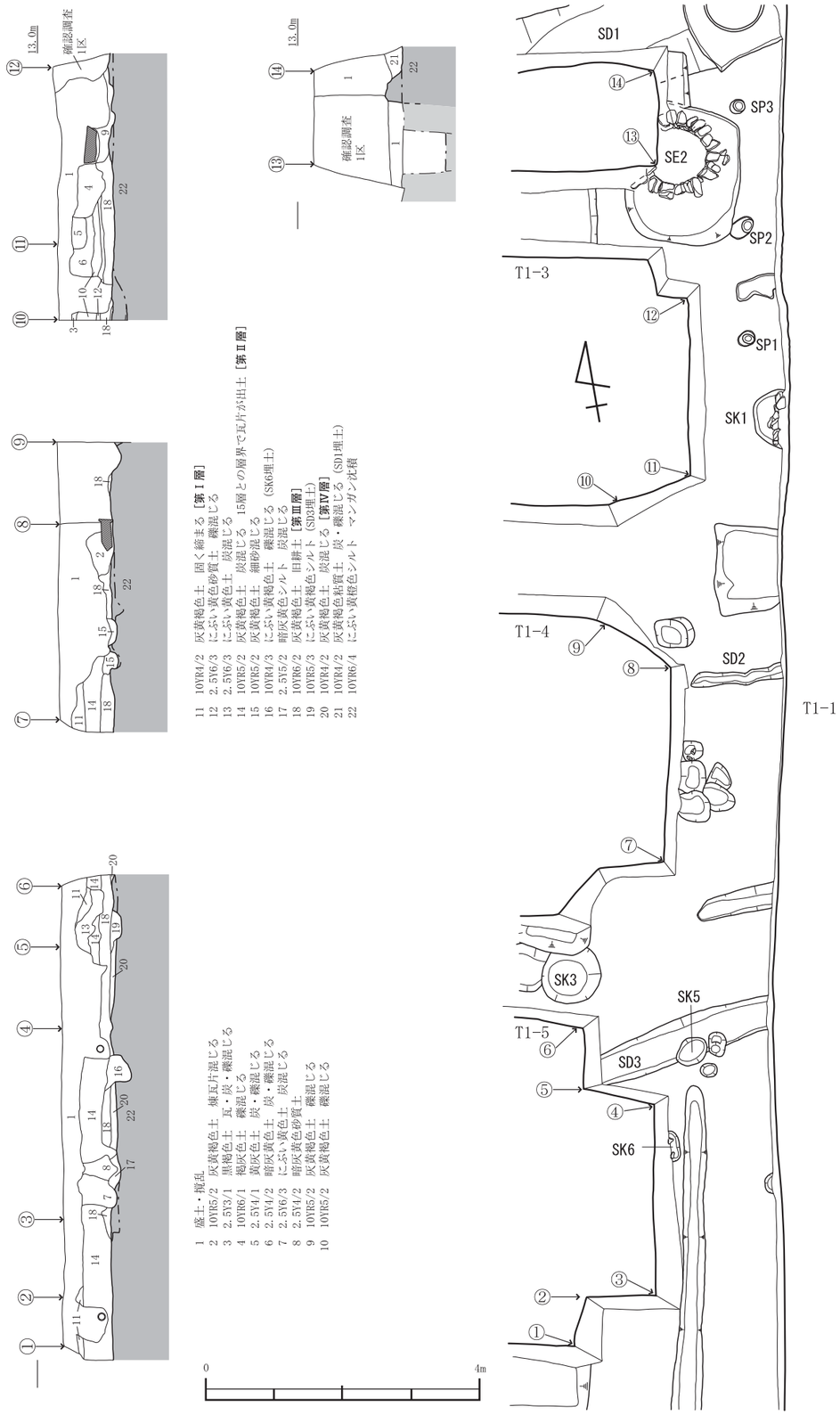
No.	調査区	遺構・層位	種 別	器 種	法 量(cm) 口径（長さ）	器高（幅）	底径（高さ）	色 調	残存率	成形・調整等	備 考
1	1-1	SD1	須恵器	甕		残4.3		4N/0 灰	細片	内面は成形痕をナデ消す。 外面は頸部から肩部に矢羽状タタキ	
2	1-2	SD1	備前焼	壺		残6.1	（19.6）	5YR4/2 灰褐色	1/8 胴部	内外面ヨコナデ	
3	1-6	SK2	備前焼	壺		残7.1		10YR4/2 灰黄褐色	細片	内外面ヨコナデ	
4	1-7	SK2	青花	皿	（8.6）	残1.6		10Y8/1 灰白色	1/8 口縁	内外面に施釉。断面は浅黄色を呈し陶胎。 口縁内面に1条、見込み部に2条、外面に2条の圏線を巡らす。	漳州窯系陶磁器
5	1-1		唐津焼	皿		残2.1	4.4	5YR5/3 にぶい黄褐色	1/1 底部	高台内は露胎。高台外面は一部施釉(灰釉)。 見込みは施釉(灰釉)、砂目痕を残す。	
6	1-1	SK6	肥前系陶器	不明				7.5Y6/1 灰色	細片	内外面に施釉。内面に鉄絵が描かれる。	
瓦1	1-7	SK2	丸瓦	―	残9.3	残8.1	7.1	7.5Y7/1 灰白色	細片	凸面は成形痕を丁寧にナデ消す。 凹面に布目圧痕(1cmあたり縦糸7本/横糸7本)	
瓦2	1-5	SK3	軒平瓦	―	残2.7	残8.2	3.5	N4/0 灰	細片	凹面・凸面ともにナデ	均等唐草文の一部か

第6図　遺物観察表 ※法量のうち長さ・幅・高さは瓦の場合に適用する。( )内の数値は復元値を示す。

図版・写真図版



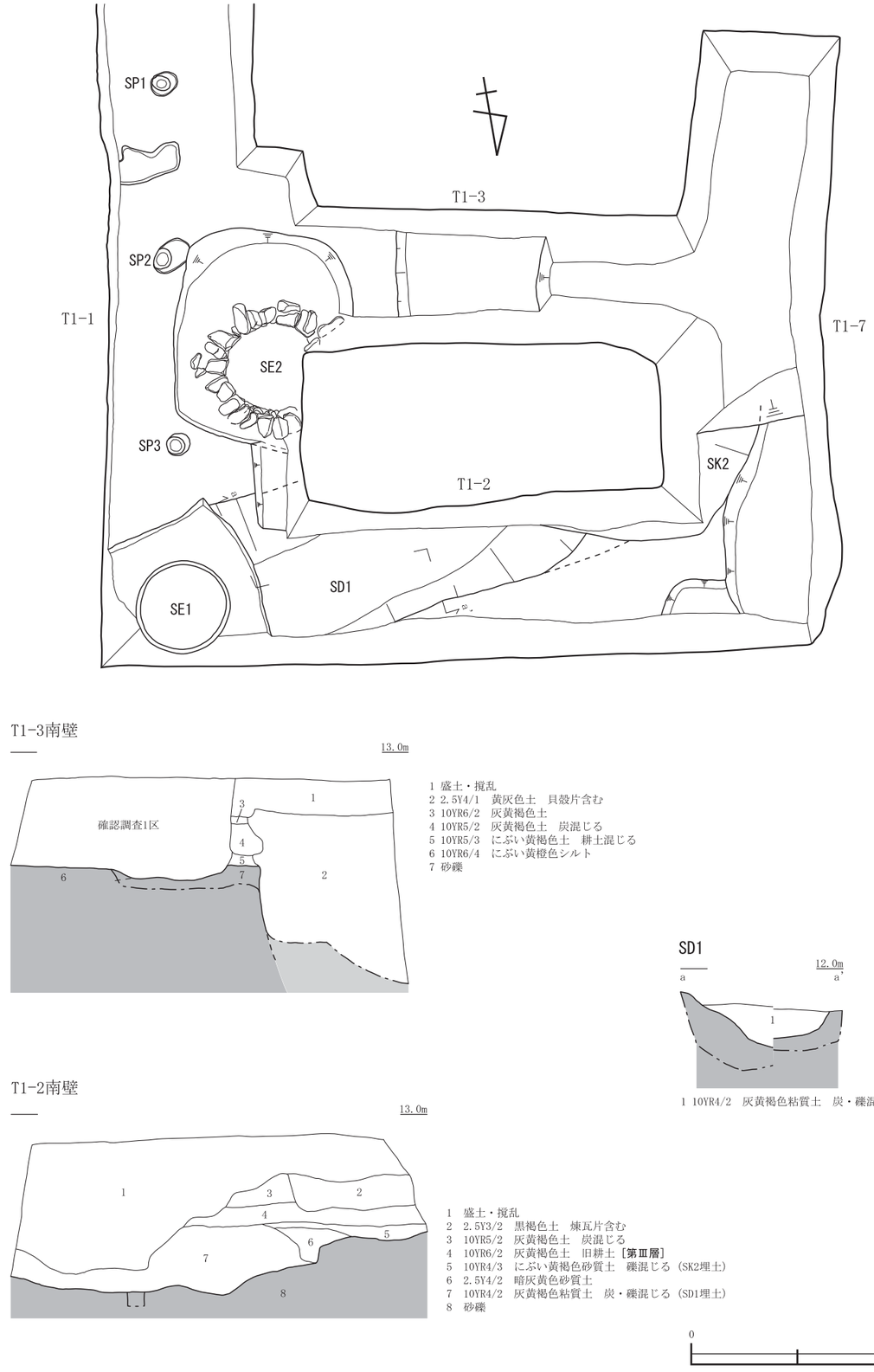
図版1　遺構全体図（S＝1:100）



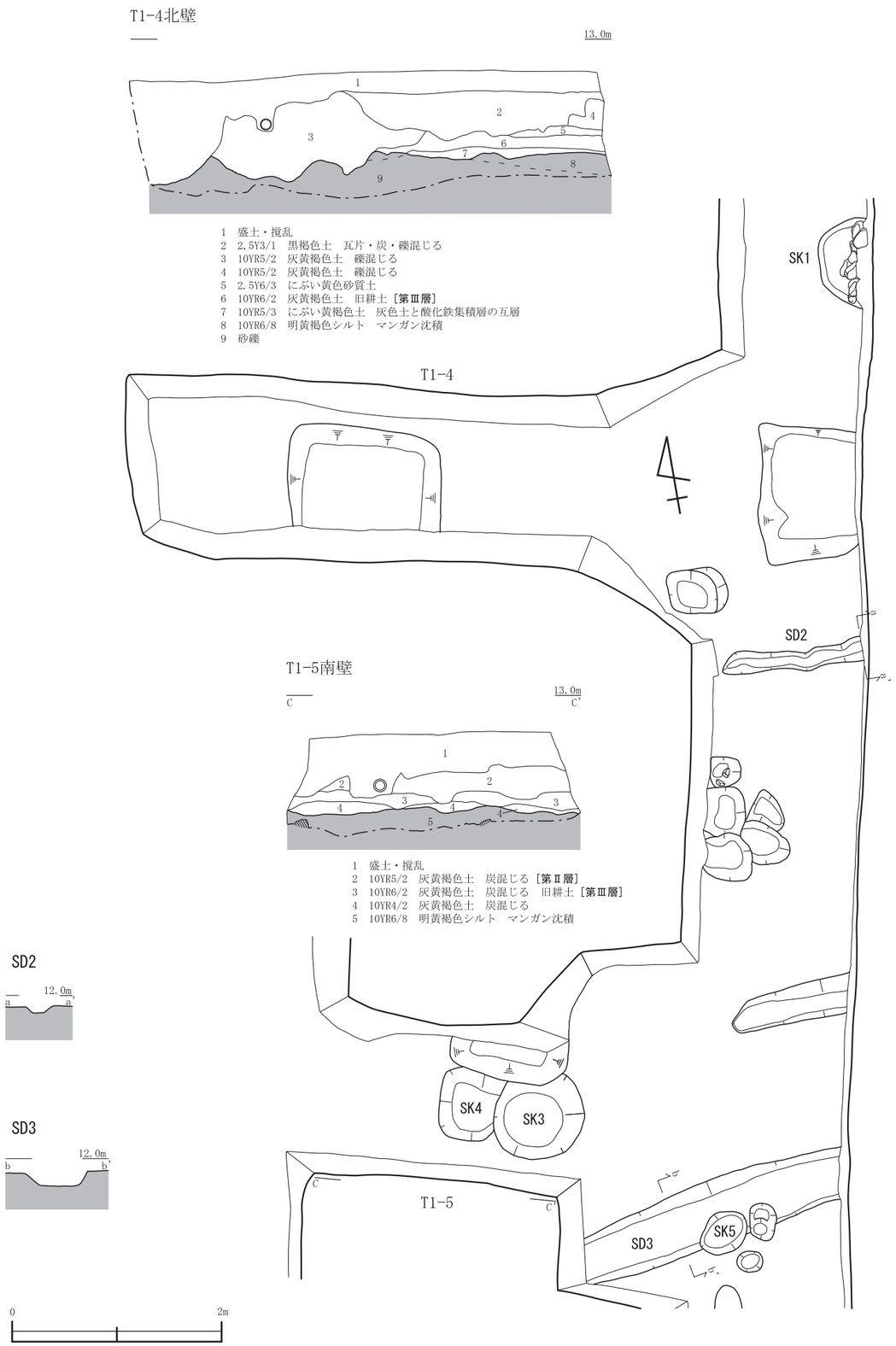
11 10YR4/2 灰黄褐色土 固く締まる【第Ⅰ層】
12 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質土 礫混じる
13 2.5Y6/3 にぶい黄色土 炭混じる
14 10YR5/2 灰黄褐色土 炭混じる 15層との層界で瓦片が出土【第Ⅱ層】
15 10YR5/2 灰黄褐色土 細砂混じる
16 10YR4/3 にぶい黄褐色土 礫混じる (SK6埋土)
17 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 炭混じる
18 10YR6/2 灰黄褐色土 旧耕土【第Ⅲ層】
19 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト (SD3埋土)
20 10YR4/2 灰黄褐色土 炭混じる【第Ⅳ層】
21 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 炭・礫混じる (SD1埋土)
22 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト マンガン沈積

1 盛土・撹乱
2 10YR5/2 灰黄褐色土 煉瓦片混じる
3 2.5Y3/1 黒褐色土 瓦・炭・礫混じる
4 10YR6/1 褐灰色土 礫混じる
5 2.5Y4/1 黄灰色土 炭・礫混じる
6 2.5Y4/2 暗灰黄色土 炭・礫混じる
7 2.5Y6/3 にぶい黄色土 炭混じる
8 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土
9 10YR5/2 灰黄褐色土 礫混じる
10 10YR5/2 灰黄褐色土 礫混じる

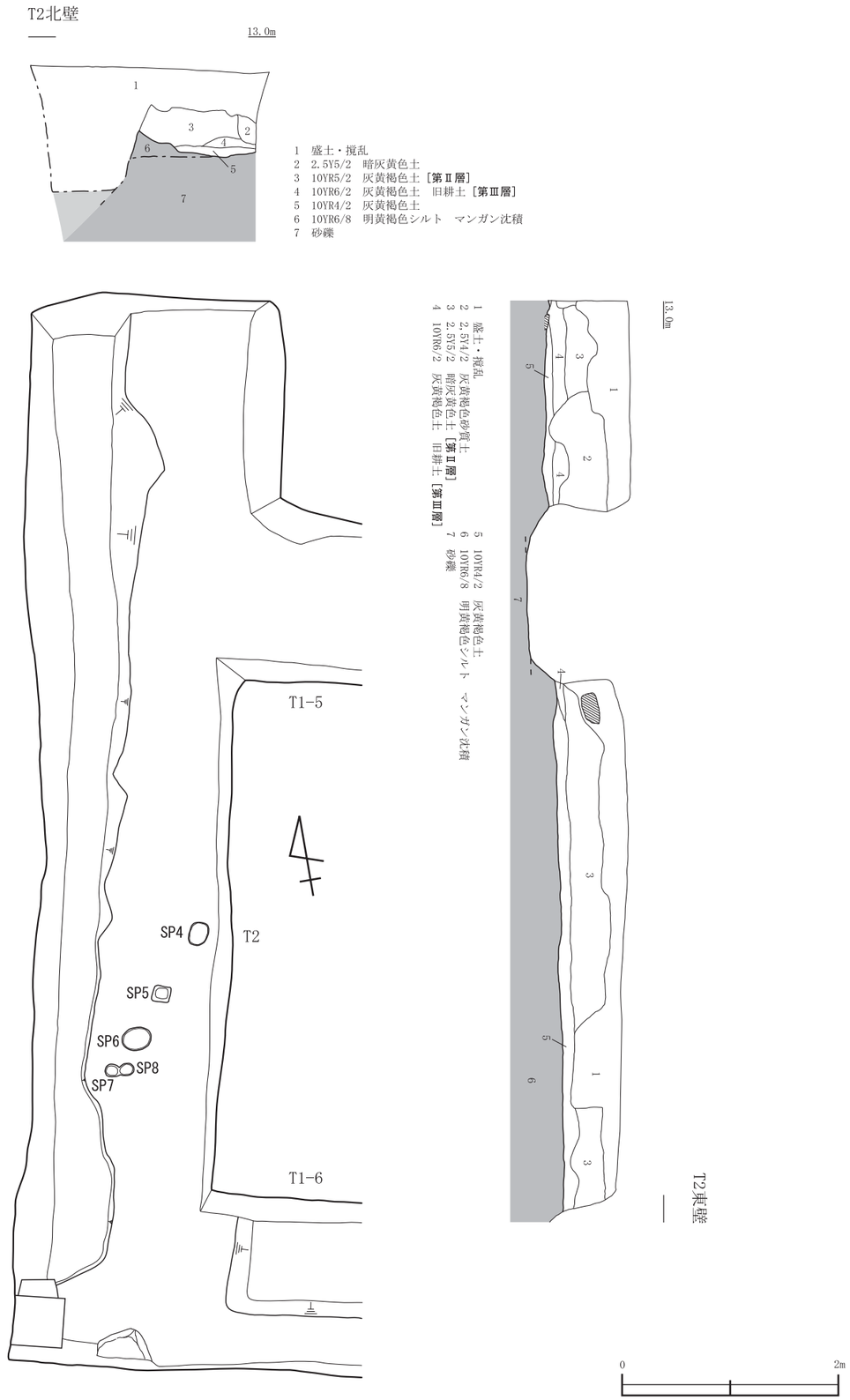
図版2 T1-1平・断面図（S＝1:80）



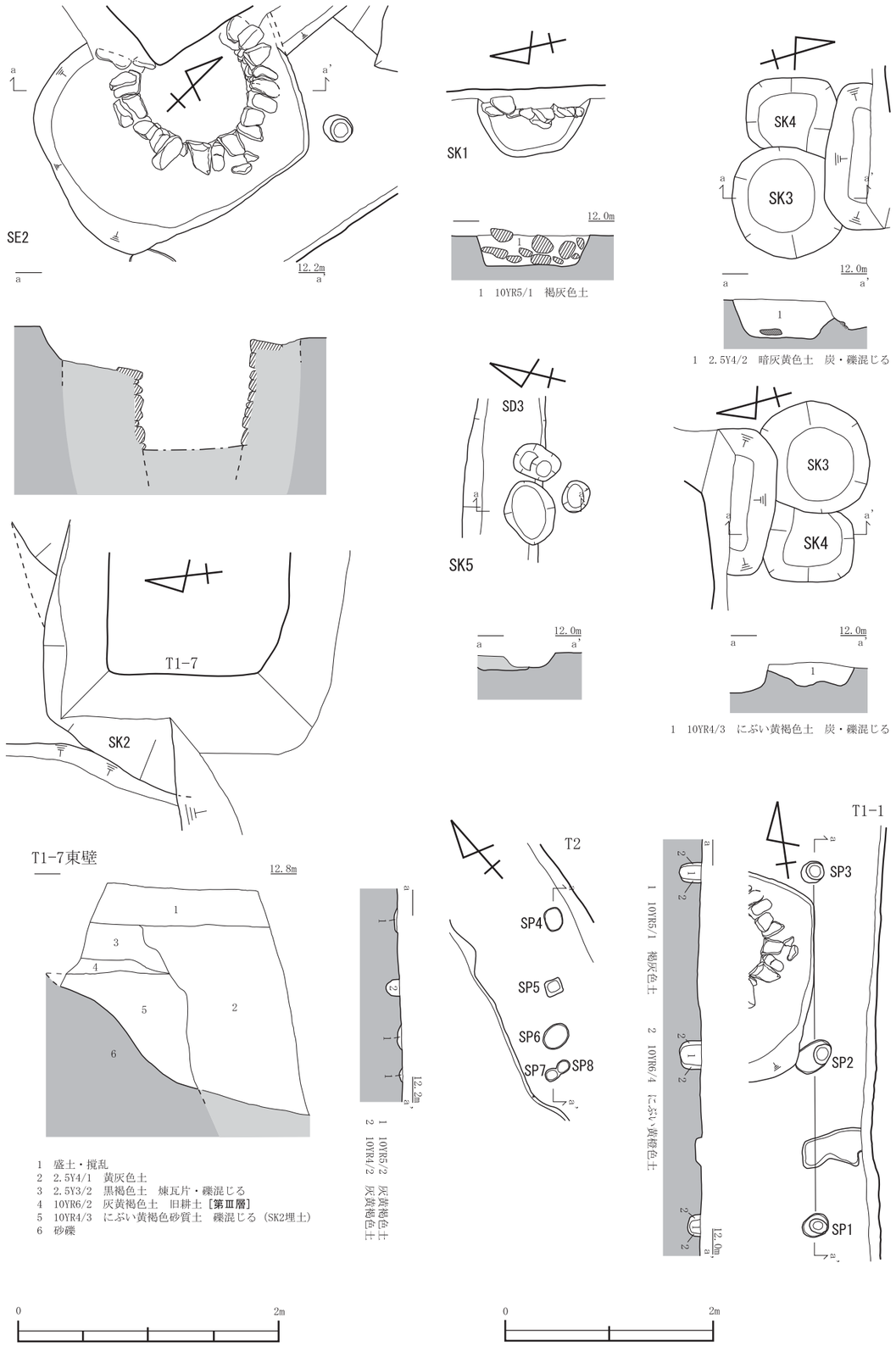
図版3 T1-2・3平・断面図 SD1断面図（S＝1:50）



図版4 T1-4・5平・断面図 SD2・3断面図（S＝1:50）

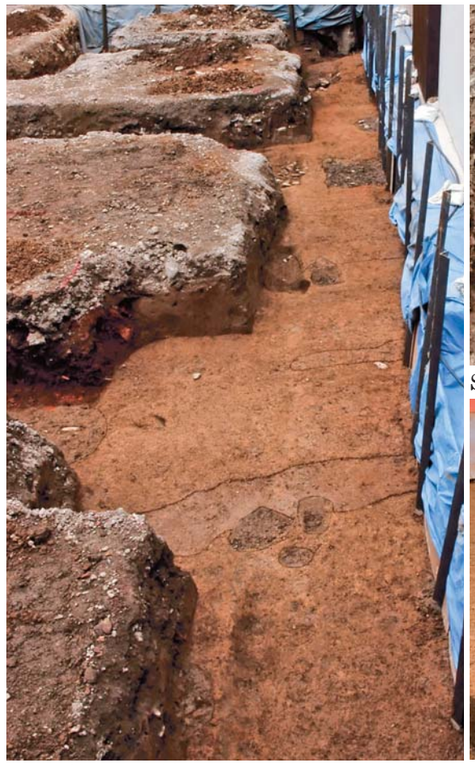


図版5 T2平・断面図（S＝1:50）



図版6　井戸・土杭（S＝1:40）・柱穴列（S＝1:50）

調査区全景（北から）



T1—1検出状況（南から）

SP1～3検出状況（南から）

T1－1西壁③－⑥・SD3・SK5（北東から）

SD1（東から）

SD1北肩（東から）

SD1南肩（東から）

T1－3 南壁（北西から）

T1－4 北壁（南西から）

T1－4 南壁（北西から）

T1－5 南壁（北から）

T1－6 全景（南西から）

T2 全景（南西から）

SE2（南東から）

SK1（西から）

SK2検出状況（南西から）

SK2断面（西から）

SK3断面（東から）

SK4断面（西から）

SK3・4（西から）

SK6（東から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと
書名	姫路城城下町跡
副書名	姫路城跡第278次　但陽信用金庫姫路支店の建替えに伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第6集
編著者名	南　憲和
編著機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1　TEL079-252-3950
発行年月日	2013年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひめじじょうじょうかまちあと 姫路城城下町跡	兵庫県姫路市 二階町 111番、113番	28201	020169	34度 49分 53秒	134度 41分 41秒	2012.4.10 ～ 2012.4.21	80㎡	店舗の建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ひめじじょうじょうかまちあと 姫路城城下町跡	集落遺跡	中世末 ～近世	井戸 溝 土坑 柱穴	須恵器 備前焼 青花 唐津焼 瓦	

姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第6集

姫路城城下町跡

姫路城跡第 278 次　但陽信用金庫姫路支店の建替えに伴う発掘調査報告書

平成25年3月31日発行

発　　行　　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印　　刷　　株式会社デイリー印刷
〒671-0218　姫路市飾東町庄57番地2